

授業科目名	生体反応学 (Biological Responses)		
対象学年	2年生	単位	12単位
科目責任者	やすだ ともはる 保田 朋波流	所属	免疫学
		所属	
		所属	
		所属	
授業方法	講義・演習形式であり、各コースで講義資料を準備する予定である（なお、ディスカッション・ディベート・学生の発表を含む可能性あり）。また、実験を中心とした実習を行う。		
概要	解剖学において生体の構造を習得し、組織細胞機能学（生化学＋生理学）で生体機能の基礎を習得した後、この「生体反応学」では細菌学、ウイルス学、薬理学、免疫学、寄生虫学を学ぶことにより、「生体がどのような反応をするか？」を習得する。この後、「病理学」においてシステムが破綻した病態を学び、さらに臨床系授業につなげる。		
到達目標	各ユニットのシラバスを参照のこと		
講義日程	別紙日程表を参照のこと		
評価項目	到達目標の達成度（基本的理解と知識の応用） 少なくとも「コアカリキュラム程度の理解」「4年生でのCBTをパスするレベル」を満たすことを評価の可否レベルとしている。		
評価法	「生体反応学」の成績は、薬理学・微生物学（細菌学、ウイルス学）・免疫学（免疫学、寄生虫学）の各コース素点の平均点で評価するが、1科目でも不合格があれば、「生体反応学・12単位」としては不合格になり、次年度に「生体反応学」全てを再履修することになる。		
予習・復習へのアドバイス	別に掲載する各ユニットの項を参照。		
履修上の注意 アドバイス	生体反応学（細菌学、ウイルス学、薬理学、免疫学、寄生虫学）に関する膨大な知識を、教科書や参考書だけで理解することは極めて難しい。この講義では、要点をまとめて概説するため、出席を強く推奨する。系統立てられたこの講義体系の性質上、一度の欠席が次回の理解に大きな影響を及ぼす。従って、講義内容を深く理解するためには、予習と復習が不可欠である。科学の進歩によって知識は絶えず更新されており、常に最新の教科書や参考書を参照するようにしてほしい。積極的な学習態度が求められる。質問にはいつでも応じるので、遠慮なく提出してほしい。さらに、研究室を自由に訪れ、研究活動を体験してもらいたい。		
推奨参考書	各ユニットのシラバスを参照のこと		